先生と指輪と私

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
先生と指輪と私

【Ｎコード】
Ｎ７４０６Ｓ

【作者名】
柊

【あらすじ】
保健室の教育実習生とある女子高生の恋の話。

（1）

先生の指には、いつも指輪があった。
左手の薬指に光るそれを見て、私は漠然と（あぁ…恋人いるんだ）と、そう思った。
苦しかった。切なかった。でも、不思議と涙は出なかった。

一度目の出会いは、やはり保健室だった。年の近い先生ということで噂になり（よし、ここはいっちょどれほどのものか見に行くか！）と、かくいう私もこっそりと保健室の扉からその姿を盗み見た人物の一人だ。自分で言うのもなんだが、見た目より好奇心は旺盛な方だと思っている。
噂の高坂誠は、今時珍しい黒髪にコンタクトではなく眼鏡をかけ、白衣を着ていた。そして専用のテーブルに座って、私なら絶対選ばないであろう小難しいタイトルの本を読んでいた。数学とか科学とか論理とかが入り混じってそうな本（私的に言えば見るだけで投げ出したくなる夢のない本）を、ゆっくりと読みふける保健室の先生。まぁ、ぱっと見に嫌いなタイプではない。けど、騒ぐほどいい男でもない。私のいい男基準が高すぎるだけだと友達は言うけれど、極めて普通。おおよそいい方より。そんな感じだ。
しばらくそうして眺めていると、目が疲れてきたのか、先生は眼鏡を外して目尻を少しつまんだ。その後、ふと目が合う。実際に見えているのかは怪しいが、確かに目が合った。やばいっ！私はすぐさま扉から手を離し、階段を駆け上がった。保健室の隣には、二階へ通じる階段があるのだ。だからその半分を駆け上がり、角を曲が

ってしまえばこっちのも。（一応念のためにギリギリ見えない位置まで上がったが）閉まった扉が再び開く音に、私は階段から少しだけ下を見る。先生は辺りをキョロキョロと見回しただけで、そのまま中に戻ってしまった。ふぅ…。危なかった。何かの本で読んだ『自分の目線より高い位置は基本的に探さない』というのは本当らしい。感謝だ。

後日、私に訪れた二回目の出会いは最悪の形だった。もっとも、保健室というものにあまりいいイメージがない私にしてみれば、当然といえば当然だったが…。まさかよりによってお姫様だっこで運ばれるなんて漫画のような醜態を晒すことになるなどとは夢にも思っていなかった。それもこれも、保健室に男の先生が彼しかいないせいだろう。

しかし、先生の指示は本当に的確だった。というより、的確にされすぎていろいろと悲しくなった。目覚めた時の私の状況はこうだ。胸元のリボンを取ってボタンを一つ外され、スカートのホックは開けられていた。にもかかわらず、先生は顔色一つ変えずに「大丈夫か？」だ。慣れているのだそうだが、それが本当なら私が今生理であることも知られているはずだ。ものすごく恥ずかしい。

そして三度目の接触。怪我をした友達の付き添いで保健室に行くと、先生の姿はなかった。少し残念。残念？何が？（何が、だろう…）首を傾げながら保健室を出ようとすると、まさかのタイミングで先生が戻ってきた。話すことなんて、ない。だから私はこのまま通り過ぎて、友達と出て行くべきだ。そう思った。だけど「池谷。」「…え！？」驚くべきことに先生は私を呼び止めた。

ななななんで名前！あ。そうか！この間紙書いたっけ！保健室に来た証である紙を唸っていた私の代わりに書いてもらった事実を思い出し、異様に恥ずかしくなった。

「次からは無理する前に、ちゃんと来いよ？」

先生は私がそんなことを思っているなんて気づかずに、笑って頭を撫でた。子供扱い。嫌なはずなのに、嫌じゃない。でもやっぱり嫌だ。それは、なぜか。それは、

たぶん私が、彼を好きだから。

自覚した。自覚してしまった。だって、そうじゃないと説明がつかない。先生の左手の指にはまっているそれを見て、苦しい気持ちになるはずがない。他の子達からすれば「それくらいの方が安心して遊べるじゃん。」でも、私には大問題。だって私は遊びじゃないもん。遊びで年上選んだりしないもん。

けれど指輪のことを抜きにすれば、私達の中はものすごく良好だった。それというのも、何かと理由をつけては保健室に通った私の努力の賜物だ。ただ一つ難点なのは、先生はどうにも国語というか文学というか小説というか。とにかく私が読んでいるような本が嫌いなこと。本の会話ができないのは、私としてはかなりの痛手だった。

（1）（後書き）

高校の時に先生との話が書きたくて書いたものを少し直しました。短編にしても良かったんですが、短いのはもっと短い気がしたので連載に…。

初掲載から誤字とか恥ずかしいので、あったらこっそり教えて下さい（笑）

（2）

先生の教育実習が終わりに近づいてきたある日、私は思い切って先生に聞いてみた。

「その指輪って、彼女さんとお揃いなんですか？」

すると先生は少し驚いた顔をした後、寂しそうな顔で「元、彼女のな。」その人について話してくれた。名前はさくらさん。高校生の時につきあっていた人で、私と同じジャンルの本が大好きな世に言う本物の文学少女だったらしい。

「中身は、天然と電波を足して2で割ったようなやつだな。後、お前と一緒でたまに貧血で倒れてた。」

…なかなか中身はすごそうだが。（っていうか中身って）そんな彼女は、ある日の朝先生にこう言った。心中って、もっとも美しい愛の形だと思うの。だから、一緒に死にましょうって。なんでもない冬の朝。電車のフォームで、彼女はそう言って先生の手をひいた。

『…冗談、だろ？』

お前となんか死ねるかという意味の返事ではもちろんない。彼女の行き過ぎた思考を止めようとした先生の言葉だ。でも、彼女は結局そのまま、先生の手をゆっくりと離し、電車の前に身を投げた。寂しそうに、笑って。後から聞いた話だそうだが、彼女は手術をしても治るか治らないかわからない病を抱えていたらしい。

先生が私が読む本に眉をしかめるのは、きっと彼女さんを思い出すからだ。更に言うならそれを読むことによって、美しい愛の形＝

心中という結論が導き出されるのではないかと、不安なんだと思う。誰だって二度もその理由で死ぬ人間を見たくはないだろう。
　先生は、後悔しているんだろうか…。彼女の手を取らなかったことを、悔やんでいるんだろうか。だから指輪を外さないんだろうか。年上というだけで、こんなにも気持ちがわからない。どうすれば女の子として見てもらえるのかもわからない。

「、き…です。」
「え？」
「私、先生が好きです。年上でも、先生でも、指輪しててもも…好きです。」

　でも、こっちを見てほしい。それが例えばどんなに醜くて、かっこわるくて、ずるくても。先生の過去に居座り続けるその人を、私は追い出したい。先生の止まった時間を進めたい。

「…池谷ならわかってると思ってたんだけどな。俺は先生で、池谷が生徒だってこと。お前なら、俺が言いたいことわかるだろ？」
「わかる…けど、」
「だったら今のはなしだ。聞かなかったことにするから、今日はもう「なんで！？」」

　わかるよ。わかってるよ。先生と生徒なんだって。恋愛しちゃいけない人としてるんだってわかってる。

「なんで聞かなかったことになんてするの！？私本当に先生が「池谷はただ、憧れと好きをごっちゃにしてるだけだって。」」
「あ、あこが…そんなことないよ！」
「ある。」
「ない！」

「あるよ。誰でも一回くらい憧れるもんだろ。先生って。」
「私はそんなんじゃない！」
「一緒だよ。年近いからそう思うだけ。」
「そんなんじゃないってば！」

そんなんじゃない。本気なのに。先生だから好きなんじゃない。高坂誠だから好きなんだ。好きになった人がたまたま先生だっただけだ。むしろ年上嫌いの私が“先生”から入って好きになるのは、かなりすごいことなのに！

「っ…なら、どうしたら信じてくれる？」
「どうしたらって…。」
「私はそんな世間体とかの話より、先生のちゃんとした気持ちが聞きたいの。だから、本気だってこと、認めてもらわないと困る。」

周りなんて知らない。だって先生の教育実習はもうすぐ終わるんだ。私だってもうすぐ大学生になる。先生も大学生に戻る。そしたら、きっとなんの問題でもなくなる。生徒でいるのは、生徒でいられるのは今だけなんだ。そこから先は、自分で関係を繋がなきゃいけないんだ。

「…８５。」
「え？」
「期末テスト。全教科８５以上取ってきたら考えてやる。」
「は、はちじゅ…ごっ！」
「無理なら「む、無理じゃないよ！」」

いや、無理。っていうか無理。本気で無理。だって８５だよ？数学とか英語とか…絶対無理！だけど、やらなきゃ信じてもらえない…。先生の気持ちも、聞けない…。

「私やる！絶対やってみせるから！」

（3）

「りっちゃん！まきこちゃん！私に勉強教えて！」

先生に８５点という難題を出されてすぐ、私はそう言って二人の友達に詰め寄った。なりふり構っていられる状況ではないと、しっかりと自覚していたからだ。

「池谷さんに…？」

「自分やらんでもそれなりにとれるやん。」

「それなりにじゃ駄目なの！全教科８５以上じゃないと！」

「８５って…通知表で４になる基準やん。なんでまた…。」

「愛よ！愛の為よ！学年トップレベルの二人に教えてもらえばきっと勝てるわ！この愛の聖戦に！」

「あ、愛の…？」

「なんかよくわからへんけど、まぁわからんとこあったら聞きにきいや。他人の気がせーへんし。」

「う、うん。そうだね。できる限り応援するよ。」

「二人ともありがとう！」

かくして、私はそれはもう一生分くらい真剣に勉強した。保健室には一度も行かなかったし、気づいたら好きな漫画の発売日にも本屋に行くことを忘れるくらい。そしてついに、その努力が実を結ぶ日が来た。

「先生！先生！」

けれど、先生はいなかった。それどころか先生が使っていた机は、綺麗に片付けられてさえいた。

「前田先生。高坂、先生は？」
「高坂先生なら、テスト期間中に研修を終えられたわよ？」

頭が真っ白になった。たぶん先生は、始めからそのつもりだったのだ。私をテストに引きつけておいて、いなくなるつもりだった。どうして気づかなかったんだろう。研修がもうすぐ終わることは、知っていたはずだったのに。その日がいつかまでは知らなかった。

だって普通そうだ。あんな課題を出すくらいなんだから、テストが終わるまではいるって誰だって思う。っていうかいるべきだろ！ぐしゃっと、勢い余って8と9ばかり並んだ紙を握りつぶす。「おっせーぞ。」「……え？」その予期せぬ声に、私は思わず今握り潰したばかりのそれを、落としてしまいそうになった。

「せ、先生？」

白衣じゃない、初めて見る私服の先生は、春なら桜が満開だっただろう、我が校が誇る桜並木の下に立っていた。その道はいわば、ほとんどの生徒が登下校に利用するメイン通りで、もちろん私も毎日そこを使っている。

「なんで…。」
「なんでって…今日、テスト返却日だろ。」
「だって先生もう…。」
「だから私服できたんじゃん。」
「だからそれがなんで！？もう関係ないじゃん！約束破ってもとの大学生に戻れば良かったじゃん！私のことなんて…！」

手間のかかる生徒のことなんて、ほっておけば良かったんだ。そうしたら、あの時あんな生徒いたなぁって、思い出だけですんだの

だ。それなのに。

「迷惑なくせに！８５なんて微妙な数字言うから！うっかり平均９２とかとっちゃったじゃんか！！どう責任取るんだ！この馬鹿！！」

「おまっ…先生に向かって馬鹿って。っていうかすっげーな。９２とか。お前数学も出来たんだ。」

「ふん…。文学少女だからってなめてかかるからだよ。」

「いや…あいつは本当に文学しかできなかったからさ。そうかー。とっちゃったかー。」

「…どうすんの？」

「どうしようね。ってか、どうしたい？」

「どうしたいって…。」

やっぱり、返事ほしい。ここまでやったんだから、ちゃんと本気だって伝わったと思うし。うん。イエスでもノーでもどんとこいや！！失恋も経験だよ！

「私は、本気で先生が好きだよ。だから、ちゃんと先生の気持ちが知りたい。今もさくらさんが好きなのか、そうじゃないのかとか。私のこと、どう思ってるのかとか。」

知りたい。私には見えない先生の気持ち。想像も、予想もできない先生の気持ち。私と正反対の本ばかり読む先生の気持ち。

「…さくらのことは、まだ好きだよ。変なやつだったけど、一緒にいると楽しかったし。本の趣味思いっきり違ったけど、あいつの独特の思考が気になって、無理して同じ本読んだ時期もあった。」

「うん…。」

本当はそんな話聞きたくなかったけど、それも先生の一部だから

私は黙って聞いてた。その間に、先生はゆっくりと私との距離を詰める。

「でも、今はさくら以上に気になるやつがいる。」

「……え？」

私が小さくこぼすと、先生はぎゅっと私を抱きしめた。先生から私に、淡い紫の色をした香りが届く。うまく言えないけど、この香水は先生によく合っていると、いつも思っていた。

「不思議だよな。もう十分懲りたはずなのに、また同じタイプ好きになるなんて。まぁさくらよりは全然文学少女っぽくないし、貧血で倒れる頻度高いし、年下だし、ほっとけないっていうか。見てて飽きないって気持ちの方が強いけどな。」

「それって…それってどういうこと？」

「いや、どういうこと？じゃなくて…察して下さい。」

「わかんないよ！先生回りくどすぎ！！」

「わかった。じゃあ一度しか言わないからよーく聞いとけ。」

「…うん。」

本当は、どこかで分かってたのかもしれない。分かってたっていっても、そうだったらいいなーっていう希望的予想だけど。先生は今日ここまで来てくれたから。そりゃ制服返しに来たついでだとか、言い訳はいくらでもあるだろうし。私にはそれが嘘かほんとかなんてわからないわけだから、後百回同じことしたら百回私が読み負けになりそうだけど。でも、

「俺はさくらより、お前が好きになりました。」

今日だけは私の予想通りみたいだ。

（3）（後書き）

変なところで切ったな…って感じがしないでもありませんが、完結です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7406s/

先生と指輪と私

2011年4月25日22時18分発行